

---

**カナ・・・大好きだよ。**

<綾乃>

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

力ナ・・・大好きだよ。

### 【NZコード】

N8742D

### 【作者名】

く綾乃>

### 【あらすじ】

力ナとはいつも一緒にいた。離れられないと思っていた。だが・・・  
・そんな力を殺したのは私だった。

## 1・・力ナが生き返った。

最近力ナが生き返った。

生き返った力ナは意地悪だ。

私の耳元で毎日のように囁く。。。

「死ね・・死ねばいいのに・・・」

力ナの声を子守唄にする日課が始まった。

私が力ナと出会ったのは16歳の春だった。

生まれて二回目

お雛様の段飾りを見た日だった。

それは めぐみの部屋に飾られており  
女の子らしく整えられた その部屋 자체が  
お姫様を連想させられ とても衝撃的で  
あの日以来 一人部屋に憧れるようになってしまった。  
そんな日だったので力ナとの出会いの日を正確に覚えている。  
力ナとの出会いは不思議なものだった。  
力ナが どこから来たのか。

それは今でも解らない。

気がついたときには いつも力ナは私のそばにいた。  
私が力ナを必要とするときには 必ず居るのである。  
力ナとの付き合いは それから 24歳まで続いた。  
力ナはあの日 確かに死んだ。

それは間違いない。

いや・・・力ナは死んだ振りをして機会を窺っていたのか〜!?  
あれから20年経つて力ナは生き返ってしまった。  
もう会うことは無いと思っていたのに  
力ナは 何をするつもりなのだろう・・・・!?

## 2・・カナの願い

思い切つて私は聞いて見ることにした。

「カナ・・」

でも続く言葉を飲み込んでしまった。  
やつぱり聞けない。

「あの時 カナは死んだよね？」

そんなことを聞けるわけが無いのだ。

代わりに出た言葉は

「カナ・・ビデオでも見る？」

そんなことしか言えなかつた。

そう・・

あの頃の私もカナには何も言えなかつた。

いつもカナの後ろに隠れて居たようなものだつた。  
それが心地よかつたし 間違いが無いと思つていた。

「何を見る気なの？」 カナが聞いてきた。

「でも、ビデオって言いながらDVDだよね」

カナが続けた。

確かにDVDなのにビデオって呼んでしまう。  
もう年だからなあ

新しいことには付いていかれない

そう思うとなんだか寂しく感じ あの頃が懐かしくなつてきた。

とりあえず 最新作をレコーダーに入れた。

SAW4・・

いきなり司法解剖シーンで頭の皮を剥ぎ頭蓋骨を切断し脳みそを取り出しが始めた。

私たちは この手の映画が好きである。

意外と平気な顔で見ていられるし食事を取ることが出来る。

ただグロテスクなシーンだけが続くものと違い

SAWシリーズは内容がある！というか

毎回 意外な展開に進んでいくのが楽しみな作品なのだ。

いつものことだけど究極の選択だ。

私には選べないな 悩んでいるうちにタイムアップだ。

そう考えていたときに

「あやなら どちらも選べなくて敗者だね！」

力ナが私に向かつて言い出し

「私は選べるよ！絶対 生き残る。勝者になれるよ。」

と続け・・

「自分の命は自分で守る。」

と言つた。

「・・・・・」

力ナは私を責めるつもりなのだろうか？

ただ固まる私を見ながら力ナが

「ねえ～アイスでも買いに行かない？」

外に出る事を提案した。

私はレコーダーを消し力ナに続いて外に出た。  
外はきれいな星が輝いていた。

「あ！流れ星！？」

力ナが見つけ

「願い事した？」と聞いてきた。

「とつさだったので出来なかつたよ！」と答えると

「あやは いつもドンくさいね！」と笑い

「私は ちゃんと願い事をしたよ！」と言つた。

「何をお願いしたの！？」と聞いてみた。

「内緒！」と力ナが答えた。

予想通りの返事が返つて来た。

コンビにまでの道は いつもと同じ道なのに  
いつもより長く感じられた。

私たちは何も話さず ただコンビに向かって歩いた。  
カナが時々蹴飛ばす小石が転がる音だけが響いていた。  
突然

「内緒だけ教えてあげる！」  
と言いながらカナが振り向いた。  
そしてさつきの流れ星にしたお願いは  
「あやの幸せを願ったの。それしかないのでしょ！」  
と言った。

### 3・洋子はいつも元気

「あや！あやの……遅刻するよー」母の声で目が覚めた。今日は早く登校する約束をしていたことを思い出した。

「まずい！洋子に怒られちゃう！」

私は急いで身支度を済ませて家を出た。なのにバス停に洋子が居ない。

「なんだよ、急いで来たのに……」

私は仕方が無いので一人でバスに乗った。

バスは定時に発車した。

その発車したバスが急に停止したのだ。

「ええ？」

思わず前を見てびっくりした。

発車したバスを止めたのは洋子だった。バスの前に飛び出し止めたのである。よく轢かれなかつたものだ。

そんなやつが隣に座るなんて……

仲間と思われたくないな。

なんて考えたけど お構い無しに洋子は隣に座つた。

「いやあ、バスに送れるところだつたけどギリギリセーフー」バスに乗ることだけを考えた行動だつた。

「恥ずかしいやつだな！恥ずかしくないの？」

バスを降りてから怒つた。

「バスに乗つてから恥ずかしくなつたの」と洋子は答えた。

「あー！」

洋子が走り出した。

学校の横のスーパーで朝市を開催していた。

その会場に向かつて走り出したのだつた。

戻つた洋子はグローブのような大きさのバナナを抱えていた。

「このバナナ美味しいでしょ？」

洋子は満足げだつた。

「そんなに大量のバナナ どうするの？」と私は心配したが

「大丈夫だよ！教室に行けば1本いくらで売れるつてば！」

洋子は暢氣だつた。

確かにバナナは売れた。

朝市で山済みにされて売られていたバナナを  
みんなも横目で見ながら登校していくのだが  
行動に出たのは洋子だけだつた。  
このバナナは美味しかつた。

私 「ねえ～信じられる？洋子がバスを止めたんだよ！」  
めぐみ「嫌だ！あや・・その時一緒にいたの？」

私 「そうだよ～信じられないでしょ？」

浩美 「一緒に居なくて良かつた～」

洋子 「だつて・・バスに乗ることしか考えてなかつたんだもん」

私 「バナナじゃ許せないよ！」

めぐみ「そうだよ～なんか別のものもオゴシテやりなよ！」

浩美 「それって結構 恥ずかしいよ！」

洋子 「仕方が無いな～何が欲しい？」

私 「そうだな・・まずは・・ジュース！」

洋子 「ええ～ほかにもねだるの？」

洋子が財布から1000円札を取り出した。

その1000円を持って私はジュースを買いに購買へ行つた。

私が部室を出るとカナが付いてくれた。

「よく轢かれなかつたよね！」カナが言つた。

「うん。突然飛び出したから危なかつたんだよ

と私が答えると

「・・・・・・・・・・・・」

カナがボソッと言つた。

「轢かれちゃえらいのに・・・  
そう聞こえた気がした。

「え？」私は聞き返したがカナは聞こえなかつたのか  
黙つてジュースを選び出した。

ジュースを5本買つて私たちは戻つた。

「ほれ！どれがいい？洋子はこれでしょーう！？」

洋子はガラス瓶に入つたジュースと決まつている。

缶は嫌いなのだ。

口にあたつた感触が嫌だと言つ。

洋子 「カナの分はあやが飲みな！」

私 「ええ？わざわざ買つてきたのにカナは帰つたの？」  
さつきまで居たはずのカナが居なかつた。  
帰つたのにも私は氣がつかなかつた。

カナは私とだけ仲が良かつた。

他の人たちと関わるのを好まないようだつた。

私が他の子たちと遊んでいるとすぐに帰つてしまつのである。  
まあいいか・・私の分にしよう

儲けた気分だつた。

その夜 洋子から電話が来て明日は一台前のバスに乗る言つ。  
隣のクラスの男の子から電話が来て

「明日 話がある」と言われたんだそうだ。

告白だな・・私は思つた。

その子はなかなかいい男である。  
だが可哀想なことに洋子は別の子が好きなのだ。

「話の結果は明日 学校に行ってからね！」って事で電話を切つた。

遊びに来たカナは

「彼があやに告白する気なのかもよ！？」なんて言つ。

「洋子に頼む気なのかもしない」なんて言つのだ。

「そんな回りくどいことなんてしないでしょ？？って私は思つよー。」  
つと答えたものの

「もしかしたら？」なんて密かに期待をした。

期待の膨らむ朝が来た。

#### 4・・不幸の始まり

朝 私が登校しても洋子は まだ居なかつた。

一台先のバスに乗つたはずなのに登校していなかつた。

「洋子は まだなの?」

私はめぐみに聞いてみた。

めぐみも浩美も まだ洋子を見てないと叫う。

1時間目が終つても洋子は現れなかつた。

洋子が登校してきたのは3時間目が終つてからだつた。  
登校してきた洋子の顔は暗かつた。

何時もの陽気な洋子とは違う。

「どうしたの? 何かあつた?」 聞いてみた。

洋子は何も答えようとしない。

廊下がやたらと騒がしかつた。

洋子は原因が解つているらしく机に顔を埋めてしまつた。

私たちは洋子を置いて廊下に出てみた。

今朝 洋子と会うはずだつた彼が坊主頭になつていた。

それを囁し立てる人たちで廊下が騒がしかつたのだった。

カナの予想は外れ

洋子に告白した彼は振られたら坊主頭にすると  
友達に宣言していくらしい。

それを止める為に洋子は彼を説得していく

遅刻したつてことだつた。

洋子の説得も空しく彼の決心は固く坊主になつてしまつた。

学校中 この話が伝わり

面白がつて振つた洋子の顔を見に来る人で教室の前はひつた返して

いた。

洋子は非情の女と言うレッテルを貼られてしまった。  
この事件で有名になってしまった洋子は  
自分の好きな人に告白も出来なくなつた。  
しばらく静かにしているしかない。

坊主の頭が伸びるまで この騒ぎは続き消えていった。

そんなある日

私たちが廊下を歩いていると視線を感じる気がした。

「洋子！何かやつたの？」

私たちは洋子の顔を覗く。

「身に覚えは無いよ」洋子は泣き顔である。

あの坊主事件には さすがの洋子も参っていたのだ。  
教室を覗きに来るものまで現れた。

絶対に何かある！

私たちは確信した。

だが・・誰にも身に覚えはなかつた。

理由を知るのに三日とかからなかつた。  
坊主頭の彼は双子の兄だつた。

その片割れが私のことが好きなんだそうである。  
私たちの知らないところで弟の頭がどうなるか  
賭けをしているらしいのだ。  
困つたものだ。

勿論私にも好きな人は別に居る。

この話を聞いてカナは大笑いだつた。

「告白されたら どうするの？」

お腹を抱えながら聞く。

「そのときにならないと解らないよ！」

カナにハツ当たりをして怒鳴ってしまった。

そんな私を見てカナはさらに笑う。

それにも頭が痛い問題だ。

洋子は「付き合ひにこしたら?」と私に言ひ。よほど堪えているらしい。

どちらにしてもまだその段階では無い。

弟が現れてからだ。

そんな日が一生来ないかも知れない。

来ないことを私は願つた。

だが・・

そんな日が来てしまつた。

兄の坊主頭が目に焼きついてしまつてていたので

私は彼の申し出を受けてしまつた。

断る勇氣を出せなかつたのである。

その結果でも学校中が沸いた。

兄の面子は丸つぶれ

洋子の人気は地に落ちて

私たちカップルは注目になつてしまつた。

初デートの日。

駅までの道のあちらこちらに知つた顔が居た。

歩くコースは初めから決まつていたらしい。

まるで見世物のようなデートがスタートした。



## 5・不調和音

双子事件が私と洋子の間を微妙なものにした。

双子弟と同席するのを洋子は避けた。

解る気もするが洋子と一緒に居る時間が極端に減ってしまった。

その間に洋子はめぐみたちと親密になつていった。

私の家は外泊禁止だつたため。

みんながお泊りの時は夜自宅に戻り朝早く遊びに行くと言つのが私の決まりごとだつた。

お泊りはめぐみの家が定番だつた。

その日も何時ものように朝早くめぐみの家に行つた。

だが・この日はなんだか違和感を覚えた。

明らかに昨晩何かがあつたようだつた。

それを彼女たちは隠している。

お互にそのことには触れないような空気を感じながら過ごした。

カナはそれを喜んでいるように思えた。

元々洋子たちをよく思つていなかつたから満足して居るような氣さえした。

洋子とカナと私は美術部なのだ。

あまり活動の活発でないクラブなので

私たちは部室を溜まり場にしていた。

顧問の先生もうるさくない人だったので

めぐみたちも集まつて毎日遅くまでそこで過ごした。

カナはそれを良く思つていなかつた。

部外者が我が物顔で出入りしているのを好ましくないと感じているのが私には解つていた。

あのお泊りの日以来

洋子が部室に顔を出さない事が増えた。

出してもすぐ帰ってしまうようになった。

私も双子弟との付き合いもあり

洋子のことを気にしながらも月日が経ってしまった。

「私 クラブ辞める」洋子が突然言い出した。

軽音楽部に入ることに決めたと言つ。

めぐみたちとバンドを組むことにしたそうである。

勿論 洋子には楽器の経験は無い。

浩美にも無かつた。

めぐみだけがピアノを小さくときから習つている。  
そんな3人がバンドを組むことにした。

「どうして急に〜！？」私は聞いた。

「・・・・・」洋子は黙つている。

「何か あるんでしよう？」私は続けた。

「ごめんね・・」洋子はそれしか言わない。

私は洋子を部室に残しまま部屋を出た。

部室の外にはめぐみと浩美が居た。

私は声も掛けずに通り過ぎた。

勿論 向こうも声を掛けてこなかつた。

あまりにも突然で裏切られたような気持ちだつた。

その時 洋子の気持ちを考える余裕は無かつた。

「私・・洋子と喧嘩しちゃつた。」みたい。

力ナに話した。

力ナは微笑み返しただけだつた。

あのお泊りの日の秘密は意外なところから耳に入った。

双子の弟君が知っていたのだ。

弟君は兄から聞いたと言つていた。

洋子たちはあの日

夜遊びに出て知り合つた子たちと遊び歩いていると言つ。その子たちがバンドをやつているので感化されたらしい。しかも そのグループの中に洋子の好きな人が居たのだ。弟君の話では性質の悪い奴らだといつ。

「洋子に会わなきや」

弟君と一緒に洋子たちを探した。

見つけた洋子たちは別人のようでタバコを吹かしたまま「なんか用〜!?」と聞いてきた。

「洋子 帰ろ!」って私は声をかけた。

「どうして あやと帰らなきゃいけないの!?」

洋子は言つた。

「どうせ あやは バンドなんて出来ない!って思つてるんでしょう?」「…

確かに そう思つてたが・・

「絶対 バンドを組むんだ!..」

洋子は意地になつているようだつた。

「邪魔だから帰つてくれない?」

そう言つたのはめぐみだつた。

「良い子ちゃんには理解できないよね?」

と言つたのは浩美。

知らないうちに私は良い子ちゃん扱いになつていた。

別に何かを言つたわけでも したわけでもないのに

私たちの関係は あつという間に壊れていた。

特別な理由が無いので修復は難しく感じた。

その日を境に彼女たちは学校も休みがちになつていった。

登校するたびに何かが変わつていた。

スカートが長くなり  
髪の毛の色が変わり  
かばんの幅が狭く  
言葉使いも変わり  
顔つきまで変わつていつた。  
私が取り残されてしまった。

## 6・・冷ややかな視線

力ナの蹴る小石の音を聞きながら  
私は力ナと過ごした日々を思い出していた。

力ナを殺したあの日から私が封印してきた記憶だ。

私は力ナと関わりあつた記憶を忘れるように努めていたのだ。  
洋子は　あれからどうしたのか！？

私は知らない。

知ろうとはしなかった。

いや・・知りたくなかったのだ。

「あや・・聞いてたの！？」

力ナは微笑みながら聞いた。

「私は何時もあやの幸せを願ってるんだよ！解つてるの？」

力ナは再度念を押すように言った。

「え？」

私はなんと返事をしたらいいか解らなかつた。

「あ！流れ星！..」

私は流れるほうを指差した。

力ナも指差すほうを見た。

「力ナの幸せを祈つたよ！」

返事の代わりに私も幸せを祈つた。

力ナの顔は満足げだつた。

「どのアイス買う？」

私は力ナと同じチョコ味のアイスにした。

「私と同じものにする癖は　そのままだね」  
力ナが言つた。

そう・・私は何時も力ナと同じ物を選ぶ。

なぜなら それを力ナが喜ぶからだ。

力ナは私が自分を出すのを嫌つてゐるよつに感じていた。

私は力ナの冷ややかな視線が怖い。

出来るだけ その視線を受けないように努力してゐたのだ。

「瓶のジュースだ！」

力ナは急に瓶のジュースを指差した。

わざとなのか？

私が洋子のことを思い出しているのを感じたのか？

洋子の顔色を窺つた。

「私の顔に何か書いてあるの？」

逆に力ナは私の顔を覗き込み意地悪そつた顔で笑つた。

結局私たちはアイスと瓶のジュースを買つた。

「急いで帰ろう！映画の続きを見なきや」

力ナが小走りに走り出した。

私も仕方なく力ナに続いて駆け出した。

「あや！急がないとアイスが溶けちゃうよ」

力ナは振り向いて言つた。

私は走るのが嫌いだ。

途中から歩き出した。

歩き出した私に気がついた力ナは立ち止まり。

「・・・・・・・・」

何かしゃべりだした。

離れていたので私には よく聞こえない。

「力ナ どうしたの？」

私は力ナとの距離を縮めながら再度聞いた。

「私 こんなもの要らない」

力ナは そう言つてた。

「何を要らないの？」私は聞いた。

力ナはたつた今買つてきた荷物の袋の中から瓶のジュースを取り出した。

そして 宙に放り投げた。

ジューースは流れ星のように空を流れ  
アスファルトの上で粉々になつた。

私は力ナの行動をただ見つめていた。  
何も言えなかつた。

力ナの顔から笑顔は消えていた。

私の嫌いな冷ややかな視線をこちらに向けていた。

黙つて見つめる私に向かつて  
「あやは洋子に会いたいの？」  
と聞いた。

## 7・・融けたアイス

粉々に散つたガラスの破片がアスファルトの上で星のようにキラキラしてた。

「カナ・・危ないよ。」

私はカナに声をかけた。

カナは何事も無かつたように歩き出していた。

私は散らばつたガラスを気にしながらもその場を後にした。

「誰も怪我しなきゃいいな」

そう考えた。

カナは家の前を通り過ぎた。

このまま歩き続けると道が無くなり行き止まりである。そこには忘れられ誰も利用しなくなつた公園がある。街灯が一つ 青白く公園を照らしていた。

風でブランコが揺れていた。

「ブランコに乗ろう」と言いながら

カナは公園に入つてブランコに座つた。

「ほれ！あやのアイス」と私にアイスを押し付け自分はさつさと食べ始めた。

私の頭の中は

「洋子に会いたいの？」と聞かれた

さつきのカナの態度のことでいっぱいだつた。

カナは何も言わずアイスを食べ続けた。

「あや・・食べないの？融けちゃうよー」

カナに言われアイスが溶け始めることに気がついた。アイスを食べる気分はどうに無くしていた。

「流れ星 あれから流れないね～！？」

カナは何事も無かつたような顔して言った。

私は多分怯えた顔でカナを見つめているはずだ。

アイスを食べ終えたカナは「ラン」「」を口にした。

「あや！押して！！」とねだった。

私は力の限りカナの背中を押した。

そのまま遠くまで飛んでいつてくれたらいいな。

フツと そう思いながら押した。

青白い光の中でカナの笑い声がよく響いた。

カナのことを「怖い」そう感じながら

背中を言われるままに押す事しか出来なかつた。  
満足したのか

「もういいよ 帰ろう」

カナが言い出し私たちは公園を出た。

家に帰ると消したはずのTVがついていた。

「あやの仕事は いつもこうだね」

とカナは笑いながらTVを消して私の方を向き

「いつも詰めが甘いんだから」と言った。

そして

「そんなあやが好きだよ！憎めないんだ・・」

カナが呟いたような気がした。

## 8・・カナの正体

双子の弟君は親切だつた。

洋子の居ない寂しさを紛らわせてくれた。

彼が居なければ学校に通つていられなかつたはずである。  
すっかり変わつてしまつた洋子たちは思い出したようにしか登校してこない。

出でくると決まつて私に突つかかり嫌がらせをする。

「私が悪い？私が何かした？」聞いてみたかつたが  
黙つて耐えた。

それがまた彼女たちを苛付かせたようだつた。

決まつたレールから外れていく彼女たちを馬鹿にしていたわけでは無いが

彼女たちには そう見えるよう

彼女たちと行動をともに出来ない私に腹を立てていた。

私はやはりいい子ちゃんでしかないのだ。

彼女たちと仲を取り戻すことは出来ない。

初めからその努力を諦めていた。

そんなんある日洋子が話しかけてきた。

「あやはカナだけ居ればいいの？」

私が黙つていると

「いつまでカナ！カナ！つて言つてるつもりなの？」  
と続けて聞いた。

そして言つた。

「カナが どんな奴だか知つてるの？」

「え？」

私が洋子の顔を覗き込んで聞いたが洋子は何も言わば行つてしまつた。

「え？カナがなんかしたの？」

「え？」

私が洋子の顔を覗き込んで聞いたが洋子は何も言わば行つてしまつた。

そう繰り返して気が付いた。

力ナつて何組だっけ？

そういうえば部室に現れるだけで クラスのことは知らない。

力ナの苗字も知らない。

学年も知らない。

彼女のこと有何も知らないことに驚いてしまった。

力ナは何処？

最近 力ナの顔を見てなかつた。

急いで部室に顔を出したが力ナは居なかつた。

双子の弟君に洋子に言われたことを言ってみた。

弟君はその話を黙つて聞いたまま何かを考えているようだつた。

「弟君も力ナのクラス知らないの？」

私が聞いたが彼は黙つたままだつた。

そして

「力ナは居ないんだよ！」

寂しそうな目で私を覗き込みながら そう呟いた。

## 9・・一人の時間

寒い・・

今日は とても寒い。

誰も集まらなくなってしまった部室はガランとしている。

「こんなに広かつたかな？」

私はあたりを見回した。

洋子が居て、浩美が居て、

楽しく過ごしていた日は ついこの前だつたはずなのに  
とても遠い日だつた気さえしてしまつ。

弟君が言つていた

「カナは居ないんだよ・・」

カナは何処に行つてしまつたの？

不思議なことに この学校にカナのことを知つている人は居なかつた。

カナはこの学校の生徒では無かつたのだ。

カナに会えない日だけが過ぎて私は高校を卒業した。  
最後にカナに会つたのはいつもことだつたか

それさえも忘れてしまつほど長い月日だつた。

「カナは居ない」

そういうつた弟君の言葉がずくづくと気になつていたが  
私は弟君に それ以上聞くことが出来なかつた。

<聞いてはいけない！>

私の潜在意識が そう指令を出している気がしたのだ。  
また弟君も そのことにはそれ以上ふれなかつた。  
二人の間でカナの話は自然と厳禁になつっていた。

いつもそばに居てくれた弟君は  
地方都市の大学に進学してしまい  
地元に一人取り残されてしまった私は就職した。

私は毎日変わらない日々の繰り返しで退屈だった。

仕事を覚え人に慣れたころ

「同窓会」の通知が送られてきた。

弟君が出席出来ないと言うので私も欠席にした。  
行ってみたかったが洋子たちの話もで出るであろう場所に  
一人で出向く勇気が無かつた。

直接 私が彼女たちに何かをしたわけではないが  
一人だけ裏切り者のような気分を捨てることが出来なかつたのだ。  
そして同窓会のことは すっかり忘れていた。

とにかく毎日が退屈だった。

特別心配事も無いのに寝付けなかつた。

ダラダラした生活をして体を動かさないからかな?

そう思い気にもしていなかつたが確かに睡眠不足だつたようである。  
夏休みになつて弟君が帰つてくるのだけを楽しみにして過ごしてい  
た。

一日が何時間にも感じられ時間の感覚が麻痺してしまつたのがあつた。  
自分が何をしていたのか?解らない。

ぼ~つとしたまま時間が過ぎていて気に気が付くのである。

「え・・?もうこんな時間なの?」と自分でも愕いてしまう。

半日 ぼ~つとしていたこともあつた。

夏休みが来るのが遅く感じられた。

「待ちきれない」そんな思いで

休暇をとつて自分から会いに行くことにした。

私らしくない行動だつたが弟君は 勿論喜んでくれた。

久しぶりに彼の顔を見て安心した私は  
眠りから覚めた私に彼が聞いた。

その日ぐつすりと寝た。

「同窓会 楽しめた〜！？」

## 10・・真っ赤なワンピース

「え・・？」

弟君の質問が理解できなかつた。  
同窓会つて どういうこと？

「同窓会 楽しめたの？」弟君が再度聞いた。

「一緒に行けないつて言つてたから欠席にしたよ！」  
私は答えた。

そう答えると弟君の顔は曇り

「あや・・・・」

名前を呼んだきり黙りこくつてしまつた。

長い沈黙の時間が流れ

そして弟君が話し出した。

「あやは同窓会に出席してたんだよ…」

「そんなバカな～私は欠席よ！」

私が欠席だと言い張ると弟君が話し出した。

私が真っ赤なワンピースを着て出席してたって兄から聞いたそうである。

「真っ赤な服？そんなもの着るわけ無いじゃないの！」

そんな派手な服を着たことは無いというか・・持つてない。  
恥ずかしくて着て歩けるわけがない。

真っ赤なワンピースを着た私は陽気に振舞い場の中心に居たそ�である。

そんな馬鹿な。

お兄さんが見間違えたに決まつている。

それにも誰と間違つたのだろう

迷惑な間違いである。

だが弟君は繰り返した。

「間違いなくあやは出席してたんだよ！…

そつ言うと私の手を取り外へ連れ出した。

弟君は黙つたまま私の手を引き歩きだした。

重い空気のまま私は黙つて着いて行つた。

彼は友達から車を借り走らせた。

向かう先は私には解らない。

弟君の表情はいつもと違いそのことが更に空氣を重くし  
私はその空氣に今にも潰されてしまいそつだつた。

「あや・・君に黙つていたことがあるんだ。」

重い空氣の中 運転中の彼が話しだした。

「あや・・黙つて最後まで聞いて欲しい。」

彼は そつ言うと首を振り

「いや・・話は後だ。」

そつ一言咳き またもや黙り込んでしまつた。  
こんな真剣な顔の彼を見たのは初めてだつた。

声もかけられず私は黙つたまま外の景色を眺めた。

時間の流れも止まつたようで窓の外の景色は一向に変わらない。

ただ 一コマ一コマ流れる景色は懐かしい町

私たちの実家がある町に向かつていることだけは確かだつた。

車は弟君の実家の前に止まり即されるまま彼の家に上がつた私を  
出迎えてくれたのは彼の兄だつた。

私たちは兄の入れてくれたコーヒーを飲んだ。  
だが「コーヒーを飲むために車を走らせてやつてきたわけではない。

「話があるんだよね・・」  
私のほうから沈黙を破つてみた。  
兄弟は顔を見合せると兄の方が席を立ち  
一枚の写真を持ってきた。

そしてその写真をよく見るようにと言いながら私に渡した。  
その写真を覗きこんだ私は安堵して

「カナじゃないの！」と叫んだ。

久々にカナの元気そうな顔を見て嬉しかった。

喜ぶ私を尻目に彼らは再び顔を見合させ

「よく見て！」弟君の方が私に注意した。

その写真は楽しそうに笑うカナが写っていた。

一体 この写真の何処をよく見れというのか？

私には理解できない。

赤いワンピースを着たカナが同級生と写っているだけだった。

特に変わったことも無い写真に私は思えた。

「何なのよ！」

私は一人に聞いた。

「赤いワンピースのカナがなんだっていうのー？」

そう二人に言いかけて気になつた。

真っ赤なワンピース・・・！？

「あ・・・」

その時大事なことを思い出してしまった。

真っ暗な部屋でTV画面から出る光りは青白く綺麗だった。

その光りを背にしたカナはまるで今TVから出て来たみたいだつた。

「思い出しちゃつたんだね。」そう言いながら

寂しそうにうつむくカナはさつきまでの意地悪なカナとは別人のよう

うで

なんだか私は落ち着かなかつた。

「あや・・私がどうして現れたのか解つてゐるの？」カナが聞いた。  
そうひとこと言つたカナの姿がTVの光りと同化して体が透けたよう

に見えた。

「カナ！」と声をかけようとした その瞬間。

カナが消えた。

TVから流れる砂嵐の音だけが響く部屋の中で私は一人 ぼうっと  
立ち尽くしていた。

それは忘れちゃいけないことが私は忘れて居たかった。

「カナ・・・」と一人呟いてその場に座り込んでしまつた。

知らないうちに眠つてしまつたようだつた。

あの状態でよく眠ることが出来たもんだ。

TVから流れるアナウンサーの声で気が付いた。  
あたりを見合はしたがもちろんカナは居なかつた。  
そう居るわけが居ないのだ。

私は立ち上がりクローゼットの扉を開けた。

クローゼットの奥に座っている箱を取り出した。

これを取り出すのはあれ以来 始めてである。

あの日 私はカナをこの世から抹殺してしまった。

そして 秘密を隠すようにこの箱の中に埋めたのだ。

私は取り出した箱の蓋をそつと開けてみた。

中に入っていたのは 真っ赤なワンピースである。

取り出したワンピースは 箱から出されて嬉しかったのか

何処からか流れてきた風に吹かれて踊っているようだった。

「カナ！」私は居ない彼女の名前を呼んでみた。

## 12・・カナが死んだ日

カナは私。  
もう一人の私。

そのことに気が付いたときカナは死んだ。  
私がやりたかったことを実行してくれたのはカナだった。  
グズグズしている私のレールから邪魔なものを排除していたのはカナだった。

カナは私の負の部分。

嫌な事は全てカナに押し付けてきた。  
そんなカナを私は捨て忘れていた。

毎日の生活に終われ思い出すことも無かつた。

あの弟君と一緒に真っ赤なワンピースを来た自分の写真を見た日。  
あの日私はあの部屋を飛び出し自宅へ戻った。  
戻った私を迎えてくれたのはカナだった。

カナの顔は脅えてた。

いつもの自信たっぷりなカナの顔とは違った。  
いや・・・いつもカナは脅えた顔だつたのかもしれない。  
私が嫌なことばかり押し付けていたのだ。

「あんたなんか要らない！」私は叫んだ。

私を覗き込むカナの姿を突き飛ばした。

カナは壁にぶつかりそのまま崩れ動かなくなつた。  
そのカナを台所から持ち出した包丁で刺した。

何度も何度も刺した。

私は泣きながら刺した。

その手を止めたのは追ってきた弟君だった。

「あや・・もういいよ！カナはもう居ない」

その声で私は手を止めた。

私が包丁で刺していたのは真っ赤なワンピースだった。  
カナの姿など無かつた。

確かにそこにカナが居たはずだったが姿は無かつた。

「初めからカナは居ないんだよ」弟君が声をかけた。

私は黙つて弟君の顔を見つめ頷いた。

真っ赤なワンピースは箱に入れてクローゼットに入れた。  
なぜだか捨てる気にはなれなかつたのだ。  
私はカナを忘れたくなかったのかかもしれない。  
そのときはそのことに気が付かなかつた。

クローゼットに秘密を押し込めたまま何年たつたのだろう?

クローゼットは何回も変わったが 箱だけはそのまま連れて歩いた。  
いや・・連れ歩いた記憶なんて無い。

ある口気が付くといつもそこにそれがあつた。

そこにあるのが当たり前のような顔をして座っていた。

ほぼ30年ぶりに力ナが現れたとき

実は死ぬことだけを考えていた。  
もう全てが嫌になつていた。

力ナに「死ね」と言わされて生きてきた。

私は彼女に生かされていたのだった。

力ナが再び消えて忘れていた現実が甦つてきた。

自ら命を経つ日まで決めて準備していたではないか。  
この世に未練は無かつたはずである。

そうだ・・・弟君に一日会いたかつたな。

そんな感情が湧いた。

彼は私のことを知りすぎていたから一緒に居ることを

私が拒んでしまつた。

私は怖かったのだ。

再び力ナが現れることが

再び力ナを思い出すことが

彼とはあれ以上一緒に居ることは出来なかつた。

彼の手を離し私のことを知らない人の中で生活を始めた。

そして30年

今私は もう進めない。

箱から出された真っ赤なワンピースが風に揺れ

私を笑っているようにも見えた。

これはカナを殺した罰なのだろうか〜！？

私はそのとき「世の中で一番不幸なのは自分だ。」

そう思い込んでいた。

涙が流れた。

頬を伝う涙は次から次と溢れいつまでも止まることが無かつた。  
気が付くとまた夜になっていた。

私は泣きつかれて眠っていたようだった。

時間だけが私の知らないうちに過ぎていた。  
握っていたはずの真っ赤なワンピースが箱に収められ  
クローゼットの中で正座していることに  
そのときは気づいていなかつた。

目が覚めた私は 無くなつた真つ赤なワンピースのことなど気づきもせず

起き上がるどボ～～つとした頭を抱えて歩き出した。

台所へ行き包丁を手にした。

手にした包丁を喉元にあててみた。

とても引けそうには無かつた。

続いて手首に当ててみた。

今度はそつと引いてみた。

わずかに血が滲んだだけだつた。

これが世に言う躊躇い傷なのかな？

ふと そう感じた時 我に返つた。

「何をやつているんだろう・・・！？そんなことじゃ死ねないのに。」

自分で自分を切りつけるなんて出来るわけがないよ。

出来るぐらいなら もうこの世に存在していなかつたはずなのだ。

この30年は長かつた。

私はこの間の苦しみはカナを殺した罰だと思つてた。

そう考えたから生きていられたのはもしそれない。

カナのことは忘れたといつても

私の何処か奥の方では覚えていたはずである。

忘れることが出来るわけが無いのである。

だから幸せになつてはいけない。

そう無意識に人生を歩んでいたのかもしぬない。

そんな風にも思ってきた。

カナは私であつたのだから私は半分になつてしまつたのである。

一つにならなければ。。。

それには私がカナの元へ行かなければ行けないのだ。

カナも方から迎えに来てくれたのに一緒に行くことが出来なかつた。

今からでも遅くないはずである。  
カナが待つていてくれるはず  
そう考えると血の命を絶つことが幸せへの道であるような気がさえ  
してくるのである。  
私はドアノブにタオルをかけ首を入れた。

苦痛は感じなかつた。

むしろ安堵感で満足な氣さえした。

フツと意識が遠のき

「これで終わりだ。」

そう感じたのを微かに覚えている。

次の瞬間

世に言つゝお花畠へに私は居た。

いや！

お花畠を上から見つめていた。

そこには真っ赤なワンピースを着た女の子がいた。

隣はベビーカーに乗つた赤ちゃん。

女の子は赤ちゃんに語りかけていた。

「一人で帰つてね。」

そう言つとベビーカーをそこに残したまま川を渡り始めた。

「バイバイ！」

女の子は渡りながら何度も振り返つて手を振つていた。

渡り終わるとしばらく川向こうのベビーカーを眺めていたが  
意を決したような表情をしたかと思つたら駆け出した。

一度立ち止まり涙を拭いたようにみえたが

振り返らず先を急ぎ走り出した。

女の子はあつという間に見えなくなつた。

赤ちゃんも気になつたが私は女の子を追つてみた。

女の子はすぐに見つかつた。

いや・・見つかつたというより女の子は待つていたようだつた。

女の子は空を見上げていた。

「やっぱり来ててくれた！」

そういうと笑つた。

喜んでいるように見えた。

「私は 行かなきゃいけないので赤ちゃんをお願いします。」

そう言つた女の子が 下を向いて何かを呴いたように感じたが

私には聞き取れなかつた。

彼女に頼まれてしまつた私は赤ちゃんの元へ急いだ。  
一人残された赤ちゃんは泣きもせず笑つっていた。

赤ちゃんの顔を覗き込んでみた時 妙な安堵を感じた。  
と・・・・

「え？」

私の視界から赤ちゃんが消えてしまった。

私の視界に広がるのは花畠だけだつた。

赤ちゃんは 何処へ行つてしまつたのだろう〜！？

川向こうの女の子が「あやちゃん・・・

そう呴いてたことに気づいていればよかつたのだが  
その時 私は気づくことは出来なかつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8742d/>

---

力ナ・・・大好きだよ。

2010年10月10日00時31分発行